

報告1 全国小さくても輝く自治体フォーラムの開催について

全国から約200人が参加

首長、議員、自治体関係者、大学関係者など

小規模自治体と地域振興の課題などをテーマに

記念講演やシンポジウム開催



第15回小さくても輝く自治体フォーラムが9月25日（土）と26日（日）の両日にわたり、プリミエール酒々井をメイン会場として開催されました。このフォーラムは、第14回までは、そのときどきの町村長有志が呼びかけるかたちで開催されてきましたが、第15回からは新たに設立された「全国小さくても輝く自治体フォーラムの会」が主催することになり、この記念すべき開催にあたり全国町村会長である長野県川上村の藤原村長よりご祝辞をいただきました。

—酒々井町の取り組みを報告—

フォーラムでは、「小規模自治体と地域振興・地域再生の課題」と題して法政大学教授の岡崎昌之氏による記念講演やテーマごとに3つの会場で分科会が開催され、住民協働をテーマとした分科会において酒々井町の取り組みについて事例報告を行いました。

—小坂町長もパネラーとして意見交換—

また、2日目は、「地域主権改革と小規模自治体の課題」と題してシンポジウムが開催され、コーディネーターには、京都大学大学院教授の岡田知弘氏を迎え、パネラーは私と神奈川県開成町の露木町長が務め、まちづくりについて意見交換等を行いました。

また、今回のフォーラムでの参加者アピールでは、地域課題を解決するため、創意工夫による各地の取り組みが紹介、報告されるとともに、住民自治を保障している小さい自治体だからこそその価値と、それを支える行財政制度の仕組みが必要であることが明らかにされ、それぞれの地域で住民生活と地方自治の発展のため力を尽くしていくことなどがアピールされました。

なお、フォーラムの参加者は、全国から首長、議員、自治体関係者、大学の関係者や住民など約200人余りが参加し、盛会裡に開催することができました。



シンポジウム

報告2 ユニバーサルデザインのまちづくりに向けて

ユニバーサルデザイン

誰もが利用しやすい

すべての人のためのデザイン

今年度の町の取り組みは

JR酒々井
京成酒々井

駅のエレベーター



続々完成へ

町では、少子高齢化社会の到来を目前にして、子どもから高齢者、障害者を含め全ての人たちが、いきいきと安心して暮らせるユニバーサルデザインのまちづくりを進めています。

ユニバーサルデザインとは、ユニバーサル＝普遍的な、全体の、という言葉が示しているように、「すべての人のためのデザイン」を意味し、年齢や障がいの有無などにかかわらず、最初からできるだけ多くの人利用可能であるようにデザインすることをいいますが、今年度の町の取り組みとして、駅のエレベーターの設置について報告します。

京成酒々井駅については、駅改札外東口に1基、改札内上り線、下り線に各1基、計3基のエレベーターが完成し、12月18日早朝から稼働します。

JR酒々井駅のエレベーターは、駅改札内、上り線は、12月15日に稼働予定、下り線は、出来るだけ時間を空けずに稼働を予定しています。また、町の事業として実施している自由通路の西口エレベーターは、平成23年1月中の完成を目指して現在工事を進めています。

役場窓口カウンターも利用しやすく改修



役場中央庁舎は、昭和47年5月に新築され38年が経過したところであり、役場窓口のカウンターが高く、窓口対応では立ったままでの申請、相談を行っている状況であったことから、住民の方々に大変不便をおかけしていました。

そこで、高齢者、障害者、お子様等への利便性の向上を図るため、健康福祉課、住民課、こども課のカウンターを低くし、椅子に座って申請等ができるように改修し、併せて床部分もフラットに改修してバリアフリー化に努めました。

今後とも、子どもから高齢者まで全ての人たちがいきいきと安心して暮らせるまちづくりを目指し一歩ずつ着実に進めてまいります。

報告3 「中川流域の治水対策に関する庁内検討会」の検討結果について

中川治水対策

—整備が進まない中川治水対策事業—

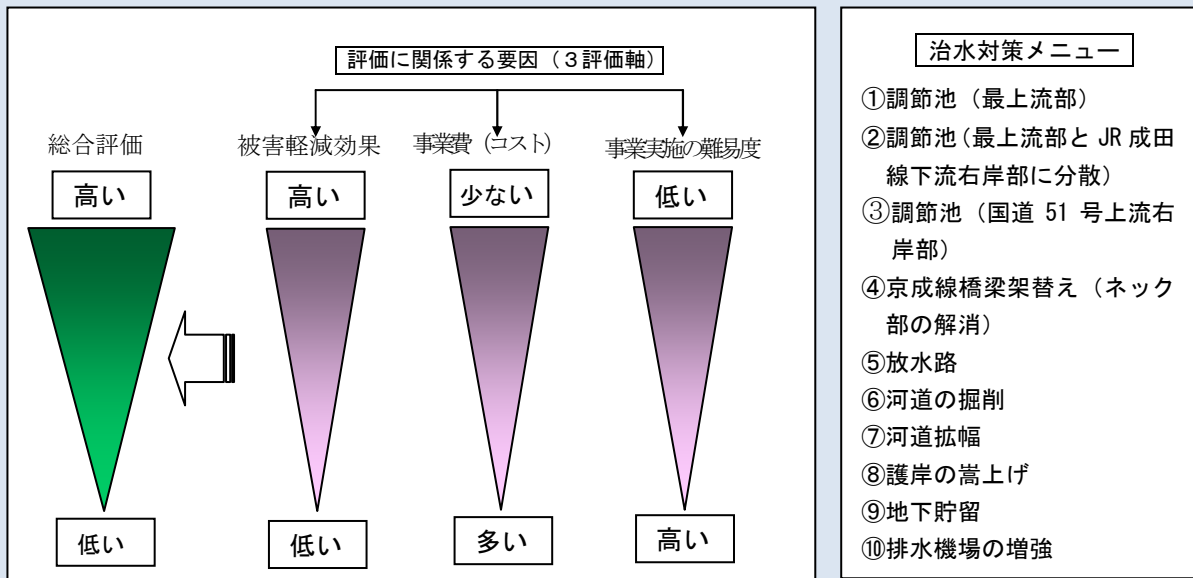
検討会の判断は、調節池の整備が最良

「中川流域の治水対策に関する庁内検討会」の検討結果について、去る12月3日に委員長から報告書の提出がありました。

当検討会は、トヶ崎自治会から中川の抜本的な治水対策を求める4度の請願が提出され、いずれも町議会において採決されているにもかかわらず議会の理解が得られずに整備が進まない中川における治水対策事業について、再度点検・評価を実施し、今後の治水対策の方向性を検討することを目的に設置され、これまでに計8回の会議を開催しました。

報告書の内容は、①複数の治水施設による対策案について、再度評価を行った結果、費用対効果等（被害軽減効果、コスト、対策の実現性）から調節池による整備が最良な手法であり、引き続きその推進を図ること。しかしながら、②まちづくり交付金交付期限内での整備には、残りの事業工程等を勘案すると施設完成が困難であり、政権交代による補助制度の不透明化により、現時点で今後の事業化の見通しが見えないこと。③被災住民の安心・安全な生活基盤の確保のためには、流域内の地域特性（保水、遊水、低地）に則した流出抑制対策を行政、町民、企業の各主体が連携して実施すべきであること。また、その着実な実効には、今後、他市における雨水条例等による規制など制度設計の検討を行うとともに、行政はもとより、洪水被害の原因者と被害者全ての流域住民が相互理解のもとに、相応の負担が伴うことが想定されること。などの報告がありました。

治水施設による対策案の評価方法



治水対策メニュー

- ①調節池（最上流部）
- ②調節池（最上流部と JR 成田線下流右岸部に分散）
- ③調節池（国道 51 号上流右岸部）
- ④京成線橋梁架替え（ネック部の解消）
- ⑤放水路
- ⑥河道の掘削
- ⑦河道拡幅
- ⑧護岸の嵩上げ
- ⑨地下貯留
- ⑩排水機場の増強

(報告3 つづき)

地域特性（保水、遊水、低地）に則した流出抑制対策（イメージ）



町は報告書の内容を十分に踏まえて 今後の治水対策を実施

現時点では、調節池の整備は**時を逸した感が否めませんが**、被災住民の苦難を考え、引き続き合意形成を図りながらその整備推進を図ります。

この間、流出抑制対策については、具体的には、①保水地域では、土地の改変の抑制、里山の保全、雨水貯留浸透施設の設置を促進し、②遊水地域では、盛土抑制等を図りその機能を保持し、③低地地域では、内水排除施設の適切な維持管理、耐水性建築の奨励等により浸水被害の軽減を図るなど、流域住民の相互理解のもと相応の負担に配慮した上で、総合的な治水対策を推進するため、条例制定など所要の実効性ある施策を実施したいと考えます。

なお、流出抑制対策には、健全な水循環系の再生を図り、湧水の復活、地下水の涵養、ヒートアイランド現象の緩和など環境面への効果も併せて期待できます。

報告4 ゆめ半島千葉国体について

37年ぶり 千葉国体

千葉県 **1位に** 天皇杯
皇后杯



9月25日から10月5日までの11日間、千葉県で第65回国民体育大会「ゆめ半島千葉国体」が開催されました。

千葉県での国体は、昭和48年の第28回若潮国体以来、37年ぶりであり、正式競技・公開競技・デモンストレーションとしてのスポーツ行事とあわせて65種目で熱戦が展開され、都道府県対抗で競われた、正式競技においては、天皇杯・皇后杯とも千葉県が1位となりました。

酒々井町ではパークゴルフ大会

—303名が熱戦—

当町では、県民を対象に国体に参加した共感を味わってもらうことを目的に、デモンストレーションとしてのスポーツ行事として、パークゴルフ酒々井大会が10月2日に、しすいの森パークゴルフ場において303名の参加者により、無事、終了することができました。

